

## 本当の多様性

鴨宮中学校 三年 田島 芽依

昨今、「多様性の尊重」という言葉をよく耳にする。この言葉を使うときの多くは障がいを持つ人や女性、LGBTQ+といった社会的に見てマイノリティの人たちに関することが話題になっているときだ。一般的に「多様性を尊重する」とは多くの人と異なる特徴を持っているというだけで差別され生きづらいと悩んでいる人たちと向き合い、差別せず認めていくという意味で使われている。このフレーズをよく聞くようになったということはつまり、これまで社会に存在していたのにも関わらず少数派であるというだけで十分な理解が得られず苦しい思いをしている人たちに目が向けられるようになってきたということだ。社会全体で少しずつ理解が深まっている。これはもちろん良いことだ。しかし、私は今の世の中は本当に「多様性を尊重できている」とはいえないと思う。むやみに多様性を尊重しようと掲げ、何でも区分けをなくして少数派に寄り添ったつもりになっている人が多いように感じる。

例えば、りんごの塗り絵を渡し、これに色を塗ってくださいと言ったとき、多くの人は赤色で塗るが、梨に見立てて黄緑色で塗る人もいれば、自分の好きな色で塗る人もいるだろう。どれも当然間違っているわけがなく、自由で良いはずだ。しかし、今の世の中は自分の好きな色で塗った人を個性的だと受け入れる一方で、赤く色を塗った人を価値観に囚われていると否定する。少数派に寄り添おうとして多数派を否定しているのだ。本当に「多様性」を尊重するのであれば、多数派か少数派かに関係なくどの色で塗った人もその人らしくて良いと認められるべきではないか。様々な形があるからこそ「多様」なのだから。

実際、最近はレスビアンやゲイといった同性愛者が社会で受け入れられ始めている一方で、「自分は同性と恋愛できない」「同性に恋愛感情を向けられると気持ち悪いと感じてしまう」という人は悪だ、いろいろな人の気持ちを理解できていないと否定されているように思う。私はこれは「共感できない」と「否定する」をひとまとめに考えていることから起こっていると考ええる。「否定する」とは人に自分の考えを押し付け、他人の意見は間違っていると批判することだ。それに対し、「共感できない」というのはただ沸き上がってくる感情がその人とは合わない、価値観が違うというだけで自分の考えを他人に押し付けているわけではなない。価値観はその人が生まれ育った環境や出会った人といった過去の経験から築かれるものであるため、人それぞれ様々な形があり、他人と差があるのも当然だ。そう考えると、他人を苦しめるのは「共感できないこと」ではなく「否定すること」つまり自由を奪うことなの

だ。「多様性を尊重する」とは様々な価値観や考えがあることを理解し、それがたとえ自分の考えと違ったとしても否定せず、そういう考えもあると認めることなのだ。異性だけ、同性だけが恋愛対象だという人も男女どちらも恋愛対象になる人もいて良い。みんな認められるべき個性なのである。

「このように本来「多様性が尊重されている世の中」とは少数派が多数派に関係なく、全員の見解が認められる世の中なのである。それなのに、今の世の中は少数派に寄り添うことに気をとられ、多数派の見解を聞き入れようとしていない。誰かを助けるために他の誰かを縛り、意見を押しつけたら本末転倒だ。好きなものは好きで、苦手なものは苦手の良いのだ。それこそが個性なのだから。私は本当の意味で「多様性を尊重する」世の中にするためには、皆が自分と同じ考えではないことを理解し、他人の考えを否定しない、干渉しないようにひとりひとりが意識することが大切だと思う。LGBTQ+に該当しないのも無関係ではない。誰だって自分のもつ感性や考えを尊重されるべきで、「多様」の中にはあなたも含まれるのだから。あなたは本当の意味で多様性を尊重できているだろうか？本当の意味で多様性を尊重できるようになれば、世の中は皆が生きやすくなり変わっていくと思う。